自分の間違いと向き合う心

梅田小学校　五年　高橋　暖

書名「償い」

著者「さだまさし」

絵「おぐらひろかず」

僕にはずっと分からないことがある。加害者の手によって亡くなってしまった人には、もう未来がないのに、どうして罪を犯した人の将来を考える必要があるのだろう。

僕のとても身近なところで交通事故があり、亡くなった子がいる。加害者が信号無視をして車を走らせたから、その子は何も悪くない。裁判は実刑六年六ヶ月の判決になったそうだ。短すぎると思った。事故にあった当時その子は十一歳だった。どれだけの未来や夢があっただろう。それからいろいろなニュースを見るたびに、僕はいつもモヤモヤしたり、テレビに向かって、なんでと怒ったりするようになった。すると母が「償い」という本を図書館から借りてきてくれた。交通事故で人を死なせてしまった

ゆうちゃんという男性が、被害者の奥さんに対する償いのために、人が変わったように働いて、毎月お金を送り続ける。七年が経って被害者の奥さんから、送金はやめて自分自身の人生をもとに戻してほしいという手紙が届く。これは作者であるさだまさしさんの知人に起きた実話だそうだ。最初に読んだ時、事故の原因は雨による視界の悪さと疲労が重なったもので、わざとではなく、ゆうちゃんもかわいそうだと思ってしまった。でもすぐに、かわいそうと感じた自分が嫌になった。これは自分とは違う世界の話だと考えているからだ。もし自分が当事者なら、こんな気持ちにならない。でも実在するこの奥さんは、ゆうちゃんを許した。どうして許す気持ちが生まれたのだろう。僕がこのことを母に話すと、被害者支援都民センターの「もう一度会いたい」という遺族の方の手記をもらってきてくれた。僕には受け止めるのが難しい内容もあったので、母が選んで読んでくれた。母は泣いていた。僕も涙が出た。喉がカッと熱くなった。やっぱり罪を犯した人の将来を

考える必要はないと思った。大切な人を亡くした事実と悲しみは、どんなに謝罪されても決して消えない。大好きな人にもう二度と会えないと想像しただけで、怖くなった。僕は何度も「償い」を読み返した。奥さんがゆうちゃんを許したことは簡単ではないはずだ。ゆうちゃんは「償いきれるはずがない」と罪に向き合い、逃げることなく、生きること全てを、被害者と奥さんへの償いに捧げた。そんな命がけで謝罪するゆうちゃんは、許されて欲しいと僕も考えるようになった。

僕は夏休みに、日本弁護士連合会のワークショップに参加した。罪を犯して裁判になった時、今ある法律の幅の中で反省の時間が決まる。反省できるのは本人だけで、もう一度人生をやり直して欲しいという願いがあることを教わった。僕は世の中のこと、人の気持ちをもっと知らなければと思った。生きていれば罪の大きさに関係なく間違うことがある。ゆうちゃんのようにその罪に真っ直ぐに向き合い、償うことが許される世界であってほしいと思った。そ

して僕自身、何か間違った時は、ごまかさず逃げない人でありたい。（原文ママ）